失恋とJAZZ

FACE RECORDS
スタッフコラム

「John Coltrane / soul trane」

初めてこのアルバムを聴いたのは高校生、もっぱらジャズを聴き始めて間もない頃だった。その頃は「ジャズってなんか良いな～」くらいにしか思ってなかったのだが、数年後このアルバムにあんなにセンチメンタルな気持ちにさせられるとは思っても見なかった。

当時付き合っていた年下の彼女に突然「話がある」と言われ別れ話をした。理由は何を聞いても答えてもらえず、結局何もわからないままさよならする形となった。…たしかに若かったし自分にも至らない点は多々あったとは思うが、まだまだこれからお互いの事を知っていって共に成長していこうという時であった。

後々知り合い伝いで判明したことだが別れてすぐに妊娠が発覚……まぁつまりそういう事だった。
相手の男は自分との仲も相談していた地元の人で相当信頼している人だったそうだ。
彼女は身体が弱くパニック障害でもあったため精神的に支えてくれる人が身近に必要だったのだと今になって思う。

当時彼女はまだ学生で、自分はバイトを掛け持ちしていた忙しいのに売れてないベーシスト。そりゃ寂しくも不安にもなる。当時納得がいかないまま別れて1週間ほど経った時、ふとこのアルバムを聴くと今まで特に気にしなかった曲タイトルがガツンと目についた。

「I want to talk about you」
邦題:あなたについて話したい

冒頭の1フレーズを聴いた途端、一気に感情が溢れ出て、思わず空を見上げたのを覚えている。初めてジャズに心を動かされた瞬間だった。

時に優しく、時に流れるようなフレーズでジョン・コルトレーン(ts)が話しかけているようで、それはまさに男が女に饒舌に語りかけているそのものに感じた。それに答えるようにレッド・ガーランド(p)の包み込むような優しいピアノが女の相槌を思わせた。口説いているのか、もしくは長年連れ添ったパートナーとの会話なのか、この曲は聴く度に聴き手の想像力を働かせる。

今回自分が聴き取ったのは「後悔」だ。

自分はあなたについて語れるほど知っていたのだろうか。話したくない事や不安に思っていたこと、自分への不満などあなたが考えていたことを自分はちゃんと理解していただろうか。もっとああしていれば、こうしていれば…。居るはずもない目の前のあなたに語りかけるように曲は進んでいく。

今願うならば
「I want to talk with you」
訳:あなたと話がしたい

ビーヒー